

## 審査結果の要旨

論文提出者氏名 石井 敏

### 論文題目 生活行動に影響を与える環境構成要素に関する研究 -グループホームにおける痴呆性高齢者の分析-

本論文は、グループホームという痴呆性高齢者の生活空間の中での人間と環境との関わりを、具体的な生活行動調査を通して明らかにし、痴呆性高齢者のための環境のあり方を建築計画的視点から提示していくことを目的としている。

本論文は二部によって構成されている。

第一部では、研究の遂行や調査・分析・考察の背景となる、さまざまな要素について理論的な検証を行い、従来の施設とは異なるケア理念や空間形態を持つ痴呆性高齢者グループホームで、それらが登場した背景や、痴呆という症状に対する社会的認識・政策的対応の変化を、客観的に詳細な分析を行っている。

第二部は全5章で構成され、行動観察を中心とした調査結果の分析・考察を扱っている。

第1章では、わが国における4つのグループホームでの調査をとおして、痴呆性高齢者の生活行動の実態を把握するとともに、生活行動に関わる環境構成要素を抽出し、生活行動に与える影響を考察している。この調査はわが国で痴呆性高齢者のグループホームの空間的な要素を研究の対象とした最初のものとして位置づけられる。

第2章では、先進的な空間形態を持つグループホームにおける事例調査から、環境構成要素の一つである空間的要素の生活行動への関わり、特に共用空間が果たす役割などを探り、グループホームにおける空間計画の手がかりを明らかにしている。

第3章では、痴呆性高齢者の空間利用の特性と共用空間の果たす役割を、同一平面形態・構成を持つ痴呆・非痴呆のフィンランドにある計8施設での比較分析を通して明らかにしている。

第4章では、フィンランドの12施設における調査を通して、第1章から第3章までで扱った調査によって判明した環境構成要素と生活行動との関わりを横断的に分析し、その様態を探っている。また、環境構成要素の質的な相違が入居者の生活行動やケアに与える影響も明らかにしている。

第5章では各章を総括し、グループホームの計画・運営における建築計画的な指針を提示し、今後の痴呆性高齢者の環境構築のあり方について言及している。すなわち、まず、生活行動に影響を与える環境構成要素としては、生活行動の前提となる物理・空間的、運営的、個人・グループ的といった一次的な要素とその要素と入居者・グループ・スタッフとの関わり、そして生活行動の中で発生する空間の利用や社会交流の発生といった二次的環境要素が存在することを述べている。そして一次的な要素は生活行動に直接的影響を及

ぼし、生活行動を通して表出される二次的な要素は再び入居者自身の生活行動に影響を及ぼす。さらに一つ一つの環境構成要素の質が相互に影響を及ぼし合い入居者の生活行動に影響を与えることから、計画に際しては、包括的に環境をとらえて総合的に遂行することを提案している。次に、痴呆性高齢者の会話や居合わせの様態の考察から、グループホームの規模としては8～9名程度が適切であることを示している。また、中程度痴呆入居者が社会交流の中心となり、全体に適度な刺激を与え活性化する役割を果たしている一方、重度痴呆入居者同士では会話は発生しにくく軽度や中度痴呆入居者の働きかけによって会話が発生していることから、入居者の痴呆度や自立度に応じたグループ特性が、それぞれの生活行動へ直接的な影響を及ぼすことを指摘している。そして、建築計画的な提案として以下の5点を挙げている。(1) 多様性のある空間の考案：グループホームにおける痴呆性高齢者の生活行動では、共用空間が重要な役割を果たし、直接的な他者との交流のほか、視覚的なつながりを求めるような間接的な交流、また居室以外の空間で一人であらずんだり、外を眺めたりといったような生活行動が見られたため多様な生活行動に対応できる場としての共用空間が求められること。(2) 「きっかけ」として作用する空間の工夫：痴呆性高齢者の思考の中では、空間や自己がいる状況を全体の中で位置づけて利用するのではなく、一瞬一瞬直面する場の状況に応じて感覚的・直感的に対応しながら空間利用をしていると考えられることから、環境の側からさまざまな生活行動を、自発的に誘発するような「きっかけ」となる仕掛けの工夫が重要となること。(3) 「きっかけ」として作用する「ひと」と「もの」の重視：痴呆性高齢者の生活行動は特に「ひと」や「もの」に引きつけられるかのように発生することから空間だけでなく「ひと」や「もの」も「きっかけ」として生活行動を方向付けることを認識して、環境デザインをする必要があること。(4) 入居者とスタッフの生活行動の関係の考慮：入居者の生活行動は、比較的、痴呆や移動の自立度の状況によって左右され、また個々が持つ個性や嗜好も生活行動を左右する大きな要因となっており、さらに高齢者はスタッフが滞在している場所周辺に集まることを好むといったようにスタッフの生活行動も痴呆性高齢者の生活行動を左右する二次的な要素として影響するため、入居者の生活行動やその空間のあり方は、スタッフの生活行動もあわせて考えていく必要があること。(5) 空間とケアのトータルデザインの探究：痴呆性高齢者のケア環境を考えた場合、良質な空間の実現だけで質の高い生活行動が実現されることはなく空間の質が劣悪な状況でも質の高いケアさえ実現できれば質の高い生活行動が実現されることもない。空間的な環境の向上は質の高い生活行動を実現するためのいわば初期条件であり、質の高い空間環境のもとで、自立度や痴呆度に応じた柔軟性のある質の高いケアが行われることで、痴呆性高齢者にとっての適切なケア環境ができあがると考えられること。

以上のように、本論文は、急速な高齢化に伴って社会的な大問題となっている痴呆性高齢者の増加と、そのケア環境の整備が逼迫した状況で、痴呆性高齢者のための新しいケア・居住形態として注目され、発展してきたグループホームの今後の在り方について、基本的な知見を明確に示し、建築計画学の発展に寄与したものである。

よって本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認められる。